

20220606 号	上海市における封鎖状況 13（最終回）	所長 南浦秀史
20220613 号	操業再開後の街の出来事 1	所長助理 徐潔
20220620 号	上海都市封鎖の感想	副所長 土佐憲弘
20220627 号	テラス席をめぐる攻防	所長 南浦秀史

上海市における封鎖状況 13（最終回）

5月30日(月曜日)17時55分、携帯電話アプリでの上海市公式発表において、6月1日0時より、住宅小区的出入り回復、公共交通機関の運航再開、自家用車の通行再開（＝封鎖解除）が発表されました。これで、黄浦江を挟んで東側の浦東地区は3月28日から、西側の浦西地区は4月1日から続いた都市封鎖は、実質上解除されることになりました。

とは言っても、6日まで公共交通機関は間引き運転、またしばらくの間、商店は入場者に制限を設けての再開、飲食店は店内飲食禁止なので、本来の姿に戻るには少し時間がかかりそうです。公共交通機関を利用したり公共の場所に入ったりするには、72時間以内に受けたPCR検査陰性証明が必要です。街のあちこちに検査所が設けられ、アプリで場所、開業日や混雑状況が確認できます。市政府は6月中の検査費用を無料にすることを発表しました。

封鎖最終日の5月31日、マンションの棟ごとに設置された住民のWeChatグループで居民委員会からの情報伝達の中継ぎや配給品を団地の入り口から棟の入り口まで運んでくれたり、抗原検査キットを各戸に配布してくれたりしたひとりのボランティア(同じ棟の住民)に多くの住民が感謝の言葉を送りました。年配の黙々と仕事をこなす方で、決して偉そうにすることもなく、時にはユーモアを交えながら、生活リズムの崩れた若者を検査に引っ張ってきたり、言葉の不自由な日本人住民に配慮してくれたりと献身的に役割を担ってくださっていました。

2か月という長期間に及んだ封鎖についてはその是非が問われています。周りの中国人の中でもいろんな意見があります。日本では過激に政府関係者や警察に抗議する住民の姿が報道されたりしているようですが、私の周囲ではそのようなことは一切なく、住民が協力して困難に立ち向かっていた印象です。

一日の感染者のピークは4月13日の27,719人でしたが、封鎖最終日の5月31日には15人にまで減少しました。新型コロナ感染症の封じ込めという意味では、大きな意義がありました。しかし、封鎖により制限された生活を余儀なくされた私たちひとり一人がこの2ヶ月に意義を見出すには、この2ヶ月をどう過ごし、今後、どう過ごすのかにかかっているように思います。

今回のレポートで封鎖状況についての報告を終了します。しばらくは、余韻に浸るようなレポートが続くと思いますが、それだけ多方面に大きな影響を与えているものとしてご理解ください。



操業再開後の街の出来事 1

封鎖解除後の上海では、「場所マ」(＝場所を示す QR コード)という仕組みが導入されました。場所マはいわゆる「通行証」で、スマートフォンで読み取って PCR 検査や健康状態が確認されたらその場所にはいることができます。陽性者のスキャン記録から、同じ「場所マ」をスキャンした他の人とすぐにリンクさせることができるので、当局が迅速な調査と正確な特定を行い、流行の拡大を防ぎます。

数日前に「場所マをスキャンできないオフライン高齢者」という動画が WeChat で拡散されています。主人公は上海のある高齢者で、バスに乗るため、バスの乗口に設置されている場所マをスマートフォンで読み取ろうとしています。通信状態や操作が悪いのなかなか読み取りを行うことが出来ません。運転手には強く催促され、他の乗客は素知らぬ顔。2 分が経過しますが相変わらず読み取りは成功せず、高齢者はとうとう断念し、「これ以上皆さんの時間を取らせたいいけない、悪かった」とお詫びの一言を残して、乗りかけたバスから降りました。彼が降りた途端、ドアがピシャリと冷酷に閉められました。

普段、高齢者の多くはスマートフォンを日常的に使用していない、あるいはスマートフォンを使用している、「マ」の読み取りや決済の方法に慣れてないため、外出や買い物、受診の際に多くの不便を強いられています。コロナ禍の期間は、どこに行くにも QR コードをスキャンして入場しなければならず、また、健康マや行程マなど、異なる「マ」を何度も切り替えて提示しなければならないため、若い人でも面倒に思う人が少なくありません。

こうした事情を踏まえて、スマートフォンを使えない人の為に、「デジタル番兵」と呼ばれる「新兵器」が開発されています。中国人は必ず持っている身分証明書(ID カード)をかざすだけで「健康コード」、「PCR 検査情報」、体温などを迅速に検証する機能を持つハードウェアデバイスです。しかし 1 台の設置につき 7000 元弱(約 14 万円)というコストの壁があるので、潤沢な予算が必要となります。現時点では病院・行政機関・大型スーパーなど人通りが多い公共施設のみに設置されています。

社会は日々変化し進歩していますが、高齢者を排除するような進歩の先には明るい未来は築かれません。科学技術の恩恵を適用し、高齢者を始めとする社会的弱者を優しく内包できる社会こそが、今、国際都市・上海に求められる姿だと私は思っています。そして、その温かさを誰でも感じられるのが近い未来の上海であることを信じています。



上海都市封鎖の感想

2ヶ月に亘って継続されました上海市の都市封鎖が6月1日に解除され、日常が徐々に回復してきました。解除初日には人の往来が一気に増え感染再拡大がないか心配でしたが、現状では局所的に封鎖されている地区はあるものの市内全域の再封鎖はないようです。

封鎖が明けて徐々に人と対面でコミュニケーションが取れるようになり、隔離中の生活について伺っていたところ、状況や受け止め方は人によって大きく異なることが分かりました。食糧が欠乏した人がいた一方で調達に困らなかった人もおり、外出制限の状況にあってもさほど困難と感じていなかった人もいました。私自身は偶然隣家の住人が日本人駐在員の方で食糧調達を助けてもらえ難を逃れることができました。

外出規制の程度や物資配給の頻度は居住エリアによって異なり運に左右されるようでしたが、受け止め方の面では、現地でネットワークを持ち情報収集ができることや日頃から自炊している人が隔離期間の困難さを緩和できている印象でした。

いつ解除されるとも分からない隔離生活は先が見通せず不安ではありましたが、少しでも楽しみやできることを見つける姿勢を学ぶ貴重な経験でした。これまで関わりのなかったご近所の方と親交を持ちネットワークを広げることができたことや、配給物資の中で見たこともない野菜等の食糧は封鎖中の隔離生活がなければ巡り合うことがなかったと思います。

封鎖が解除され半月程経ちましたが今も飲食店では店内飲食が禁じられており、一頃の日本のように店先でお弁当を販売する光景をよく目にします。当事務所が入居する上海国際貿易センターの食堂も当面は弁当販売のみのようです。事務所再開を祝ってスタッフ全員で食事に行くことができる日を楽しみにしています。



テラス席をめぐる攻防

2ヶ月にも及んだ都市封鎖は、さまざまなところにその爪痕を残しています。上海市では、中小事業者救済措置として、社会保険や諸税の納付について納付期限を延長したり、公営施設での封鎖期間中の家賃減免措置を発表したりしていますが、日本のように給付金が出るわけではありません。家の近所では、レストランや小さな商店がいくつか店を閉めました。しかし、その代わりに入るテナントの工事がすかさず始まっており、そこは中国・上海の勢いを感じさせます。

上海市に来て驚くことはたくさんありますが、その一つに、意外と街中に緑が多いことがあります。日本では街路樹は落ち葉対策として、葉の落ちない樹木に代えられたり、そもそも道路脇の植樹そのものが見直されていたりします。しかし、上海市内は、そうではありません。日々道路の落ち葉を清掃している職員がいて、かなりのコストがかかっていると思いますが、街中に緑があふれています。

そして、その豊富な緑を活用して、テラス席が設けられているレストランが多くあります。レストランは未だ店内飲食禁止で、デリバリーや持ち帰りのみ可能ですが、当局と店の間ではちょっとした腹の探り合いがあります。封鎖解除になった当初、お店としては、テラスは店内ではない、という主張で、テラス席でのみ営業をしていました。しかし、そこに多くの人が集まり、酒を飲んで賑やかに遅くまで食事をしていることから、当局により禁止されました。次に店がとったのは、あくまでデリバリーと持ち帰りしか対応していない、しかし、店の前にテラス席があり、客が勝手にそこに座って飲み食いしている、というものです。あるエリアでは、テラス席が使えないように椅子も机も重ねて規制線のテープを貼って動かせないようにされました。しかし、別のあるエリアでは、朝見るとそのように片付けられていても夕方には元にもどっています。上海では、店も客もなかなかたくましいようです。

